紹　介

藤井和夫著『ポーランド近代経済史——ポーランド王国における織維工業の発展（一八一五—一九一四年）』

アンジェイ・ワイダ監督の『約束の土地』という映画を御覧になった方は、ドイツ・ユダヤ・ポーランドの青年企業家が手を組んで原野に巨大な織物工場を建て、そこに雇用された大量の労働者が劣悪な労働条件のもとで働いているシーンを覚えておられるかもしれない。ワイダは、様々な民族を巻き込んで発展する一九世紀後半のポーランドの資本主義の持つエネルギー、その光と影の両面を巧みに描いている。

本書の主たる対象は、この映画の（そしてその原作であるポーランドのノーベル賞作家レイモントの同名の小説の）舞台であるポーランド王国の都市ウッジを中心とする織維工業の発展史である。一九世紀のポーランドというと、我々はとかく近代ヨーロッパ史上の悲劇のヒロインとして、ショパンのメロディや繰り返される民族独立蜂起の栄光と挫折の歴史を思い浮かべがちだが、著者はあえてそのようなイメージから距離を置こうとする。「一九世紀ポーランドを経済的後進性と革命と蜂起の国として描くのではなく、極めて不利な環境の中で驚くほどの経済的成果を示した国として見てみたい」（はしがき）というのが、本書における著者のねらいなのである。

序章「研究の意義と本書の課題」に述べられているように、一九世紀ポーランドの資本主義工業の成立・発展史に関しては、研究が進んでいないわが国はもとより、実証研究が積み重ねられてきたポーランドにおいても、その工業化の意義について比較的ネガティヴな評価が与えられてきた。その理由は、ポーランド王国の工業化が主としてドイツ系の企業家による外国市場（ロシア）向けのものであり、そのことが民族独立にとってマイナスとなったし、後の民族国家としての経済発展にも結び付かなかったという点にある。著者は、分割後、ワルシャワ公国時代を経てロシアの支配下に置かれたポーランド王国領、とりわけそこでの最大の織維工業地帯たるウッジ地帯に焦点を絞り、工業化の主体的条件（ポーランド王国政府の工業育成政策と、その結果としての企業家の経営活動）と客観的条件（ロシア市場の存在）との双方に目配りしながら、このような伝統的歴史評価の再検討を試みている。本書が対象とする時代は、一八一五年のポーランド王国成立から一九一四年の第一次大戦に至る期間であるが、著者はそのうち一八六〇年代までをポーランド王国織維工業の成立期、一八七〇年代以降をその発展期として、議論を進める。

第一章から第三章までは、著者の言うポーランド王国織維工業の「成立期」における王国政府の主体的な工業育成政策と、その成果としてのウッジ地帯における近代的織維工業の急成長の分析にあてられている。その結果、大蔵大臣ルベツキを中心とする初期王国政府の財政援助なしには一九世紀のポーランドの織維工業の成立はありえなかったこと（第一章「初期ポーランド王国政府の工業育成政策」）、ウッジ市を中心とする工業地帯の成立それ自体が政府の政策的意図に基づくものであり、ウッジ市当局自体が積極的な手工業者入植政策を進めて工業育成政策の政策主体となっていること、労働力供給の面では不熟練労働者は相対的

に国内で充足されたが、熟練労働者を中心に外国、時にドイツ、チェコ方面からの移住者に多くを負っていたこと（第二章「ウッジ繊維工業地帯の成立」）等が明らかにされる。第三章「ポーランド王国繊維工業の成立」では、「成立期」のウッジ工業地帯の発展の様相（とりわけ一八四〇・五〇年代の羊毛工業から棉工業への転換）が数量的にとらえられている。

続く第四章「ポーランド王国繊維工業の発展」は、一八七〇年代以降の「発展期」の分析である。ロシアの保護関税政策への方向転換によりポーランド王国繊維工業は広大なロシア市場を確保し、目覚しい発展を遂げる。その勢いは、原棉消費量の成長率や人口一人当りの原棉消費量を見る限りドイツと肩を並べフランスを凌駕する程に急激なものであった。但し著者は、ロシアの関税政策転換後直ちに生産と雇用の増加が始まった事実に注目し、王国繊維工業の発展に対するロシア市場の役割を第一義的なものとはとらえず、それまでに形成されていた繊維工業の潜在的な成長力を顕在化させたという意味で、多くの複合的な発展要因の一つとみなしている。

この点は第五章「外国貿易と国内市場」においてより具体的に展開される。著者は所謂「東方市場」問題こそがポーランドの工業化の性格を規定した（古典的にはR・ルクセンブルクに見られる説）とは考えない。むしろ上述のような工業化の主体的条件と客観的条件の結合のあり方にポーランド王国工業化の基本的構図を見い出そうとする（従って、市場は工業化の主たる要因のひとつにすぎない）。以上の前提に立ってポーランド王国の国内市場と貿易構造が分析された結果、この国の工業化は、比較的緩慢だが着実な国内市場の成長に支えられつつ、工業先進地域の西欧（プロイセン）と後進地域のロシアの両者に対してそれぞれ異なった分業関係を取り結びつつ進んでいたことが明らかになる。国内需要に支えられて既にある程度発展しつつあった繊維工業に、ロシア市場という「身に不釣合なほどの発展可能性」が与えられることにより、工業化に一層のドライヴがかかったのである。

第六章「ウッジ繊維企業の成長」は、以上の五章とは若干趣を異にし、経営史的な観点からウッジの外国人を中核とする企業家に光を当てている。従来のポーランド史学においてはこれらの企業家はその反ポーランド民族的性格ゆえにポーランドを代表する企業家とは見なされていないが、著者はポーランドの史家が重視するワルシャワの特権的な金融・商業ブルジョワジーよりも、純粋な産業資本家として成長したウッジの企業家こそ典型的なポーランド王国の企業家とみなされるべきであって、彼らはたとえ外国人であっても工業化にとってオーソドックスな役割を果たした、とする。

以上の検討を踏まえて「結語」において著者は、ポーランド資本主義の「植民地的発展」・「人工的・接ぎ木的性格」を強調する「ドイツ・ブルジョワ史学」、ポーランドの工業化の特殊性をイギリスを典型とする自立的な国民経済の発展の遅れ・弱さに見るポーランド史学の双方を批判する。後進国の工業化には、その国が置かれた具体的な政治的・経済的・文化的諸条件に応じて多様なヴァリエーションがありうるという前提に立って、たとえ市場と企業家とが外国に依存したものに見えようとも、政治的に不利な条件下で一九世紀後半の半世紀間に繊維工業の生産額で三〇倍以上の成長

を遂げたポーランド王国の工業化の成果は、まさに「ポーランドの工業化」として正当に評価されなければならない、というのが著者の最終的な立場である。

第一次大戦後の独立ポーランドへの展望が必ずしも明確でないこと、ウッジの繊維工業に集中する余り王国の他の産業部門との連関が見えにくいこと等、手薄な部分がないわけではないし、民族独立問題へのこだわりをあえて一旦捨象して工業化の進展を注視するというアプローチにも賛否両論あるであろうことが予想される。しかし、本書においてわが国で初めて数量的な裏付けを伴って一九世紀のポーランドの急激な経済発展の様相が明らかとなったことは何よりも貴重であるし、著者のアプローチは日本人が外国研究に携わる際に何をなしうるかという問題についても多くのことを考えさせる。

（A5版　一八二頁　一九八九年一月
日本評論社　三二〇〇円）

（小山　哲　京都大学助手）

福井市編集・発行
『福井市史　資料編別巻
絵図・地図』

地方史誌において、古地図をカラーの口絵や折込みのかたちで収載する試みは、従来とも行なわれてきたし、旧尾張藩に属する幾つかの市をはじめとして、デラックスな別冊村絵図集の類を出している例もすでに少なくない。しかもその間にあって本書は、質量ともに圧巻といえるであろう。復製技術の進歩もさりながら、図像資料見直しの時流を反映しているわけであろうが、このようにゴージャスなプロジェクトを決断された福井市はじめ、監修・編集に関係の各位に敬意を表したい。はじめに本図巻の構成をあらまし紹介しておこう。即ち「監修のことば」（菊地勇次郎）、「凡例」などにつづいて以下のごとく、「古代・中世」を一括し、伝存図の大半が属する近世に関しては、ジャンル別に配列、明治以降の刊図に及ぶという編成である。カッコ内は収録図数で全九九点。「凡例」にもいうように「彩色されている資料は原則としてカラー図版により掲載」、まさに壮観というべきである。その他、各図の所蔵・法量・「図像内容が示す年代」が解説に明記されるほか、巻末にもそれらを総覧するリストが付されている。

1古代・中世（6）　笠島清治・小林健太郎
2国絵図（3）　海道静香
3城下絵図（11）　松原信之
4町絵図（5）　松原
5城郭図・屋敷図（8）　吉田純一・舟沢茂樹
6寺社境内図（5）　八杉利正・野尻修
7村絵図（6）　吉田健・吉田叡
8検地分間図（9）　小林
9浦絵図・漁場図（6）　岡田孝雄
10河川図（5）　吉川博輔
11水利図（7）　吉田叡・吉田健
12道中図（3）　野尻・舟沢
13相論図・境界図（5）　印牧邦雄・野尻
14明治期行政区画図（3）　小林